

〔嗟峨野物語〕一鷹は大たか也。鶴はいたか也。はしたかとも申はしたかとは歌などには摠の名にて侍れ共はいたかの名也と。古人才學の人去るしおけり。兄鷹とかきてせうとよむ。せうとはまづ生長するゆへ也。

〔袖中抄九〕と。か。へ。る。鷹。 われが身はとかへるたかとなりにけりとしをふれ共こひをわすれず

顯昭云、たかにかへるといふことをよむは毛のかはるなりと。やがへりといふは、鳥屋にて毛のかはるなり、やまがへりといふは、やまにてけのかはるなり、

〔曾禰好忠集〕八月中

とやみればわかなつかひのかたがへり。秋きにけりとをほぞまなへる、

〔運歩色葉集〕奴温鳥鷹取生鳥寒夜握之暖足翌

〔後京極殿鷹三百首〕冬部五十首

鷹のとるこぶしの内のぬくめ鳥氷る爪根の情をぞしる

〔梅園日記三〕ぬくめ鳥

雅言集覽云、後京極殿鷹三百首、鷹のとるこぶしのうちのぬくめ鳥氷る爪根のなさけをぞしる。西園寺殿鷹百首空さゆるひとよの鷹のぬくめ鳥はなつ心もなさけ有かな。但此歌塙本に見えず。鳥柴雪といふ書に出たり、かの書の異本なるべし。按ずるに別本にて然も注あり。按に臂鷹往來寺入道相國蛭居百首一册、園羽林注。注云、ぬくめ鳥とは、如何にも寒き夜、小鳥を生ながら、鷹の兩の手にて取かくし、足をあたゝむる也。其朝はなちやりて、此鳥やとらんとて、其へ行ず情をなす也とあり。又前の後京極殿三百首にも亦注本あり。注云、鷹の野をかける時は、爪をふかく嗜也。小鳥を殺さずして我こぶしをあたゝめて、明れば放つなり。かれをはなちやり、其方へ三日ゆかざる處をつまね